
その後の世界

古手川 一輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その後の世界

【Nコード】

N5359X

【作者名】

古手川 一輝

【あらすじ】

普通の人生を送っている相川和樹 27才、仕事の帰り道に事故により死亡する。気がつくところには死んだ後の世界、「デッドワールド」だった。

そこには今までと同じようにお金や仕事があり死んだ人は新しい人生として生活している。和樹も新しい人生を送るために好きな仕事に就職して生活するが現世とは違ういくつかの「ルール」があり、最終的に「稼いだ金でもう一度現世で生まれ変わることができる」という。和樹は今度こそ普通ではない人生を送りたいために仕事に

そしてもう一つのルールに脅えながら生活をしていくストーリー。

俺は死んだ

「俺は相川 あいかわ 和樹 かずき 2011年11月30日午後11時34分・・・俺は死んだ。」

第1章 「俺は死んだ」

俺の人生は普通そのものだった。普通の家族で普通の高校、大学、普通の会社に就職して早5年、俺は27才で正直人生に飽きていた。その日もいつもの仕事を終えいつもの時間、いつもの道をスクーターで帰っていた。暗い道、スクーターを走らせると向こうの林から何かがぼんやり光っているのが見えた。俺はこの時初めて幽霊を見たのだと思った。ここは交通事故が多発している場所で噂でよく霊が目撃される場所で近所では心霊スポットとして少しは知られていた。俺はドキドキしながらその光とすれ違うのを待っていた。どんな距離が近くなり胸の鼓動が強くなる。そしてはつきり光の正体が目に映った。その正体は白いワンピースで髪の毛の長いキレイな若い女性ですれ違う瞬間まるでスローモーションのように彼女の顔をはつきり見ることができた。彼女の肌は雪のように白く、目はくつきりと大きかった。ほんの数秒間僕は彼女しか目に入らなかつた。

次の瞬間、すごい衝撃と同時に僕は宙に舞い上がった。地面に叩きつけられた僕はまだ自分に何が起こったのかわからなかつた。ぼんやりする中で周りを見てようやく今の状況がわかつた。どうやら正面からきているトラックに気づかず正面衝突をしたらしいトラックのおじさんが何か俺に呼びかけているが聞こえず、体はピクリとも動かない。

「俺は死ぬんだ・・・」意識が薄れる中でそう思った。だんだん感覚がなくなり何も感じなくなると体が浮き始めた。宙に浮いた体を動かし下を見るとそこには叫んでいるおじさんと血だらけの自分がいた

離れていく自分の体を見ながらあのぼんやり光る彼女を見つけた。

彼女は浮いている僕を見つめてそのキレイな顔からは想像できない
ような不気味な笑みでニヤリと笑った。その時初めて俺は彼女によ
つて殺されたのだとわかった。

< 午後11時34分 相川 和樹 27才 事故のため死亡。 >

第1章終わり

俺は死んだ（後書き）

興味が持てたら続きも呼んでください。

ようこそ、デッドワールドへ

第2章 「ようこそデッドワールドへ・・・」

宙に浮いて体からどんどん離れていく和樹は急に意識がなくなり気がつくとももない小さな部屋の真ん中に和樹は座っていた。

和樹「ここは・・・どこ？」

和樹「たしか事故で死んで・・・それから・・・だめだ思い出せない。」

部屋のまわりを見渡すと何もなくドアだけがポツリとあるだけだった。和樹は少し不安になりながらドアを開けその部屋を出た。部屋を出ると真っ白な空間に大勢の人が何かに並んで大行列になっていた。近づくとも最後尾の所に警備員のような人がいる。

警備員「はい、ここが最後尾なので並んでお待ちください。」

和樹は不思議に思いながらも並んだ。和樹はたまらず自分の前に並んでいる人に聞いてみた。

和樹「これは何の行列なんですか。」

前に並んでる人「いや何かわからないけど、どうもみんな一度死んでここにいますよ。実は私もさつきガンで死んだんだよ。」
とその人は不思議そうに言った。

それから少しずつ前に進みながらその人と何で死んだのか、ここはどこなのかなどを話していた。進んでいくとも大きな教会に行列ができていくことがわかった。

だが、何もへんてつもない教会に和樹はあることに気付いた。

和樹「こんなに人が並んでいるのに教会から出て行く人が一人もいない」

確かにぎつと行列を見る限り500〜600人はいるが教会に入つた人は誰一人も教会から出て来なかった。そんな事に気付いても和樹は不思議と気にしなかった。どンドン教会に近づきついに自分の順番が来て教会の扉がゆっくりと開いた。教会の中は静かで並んで

いた人達は誰もいなかった。いるのは1人の神父と左右にドアがあるだけだった。

和樹はその変な教会の雰囲気初めて恐怖のようなものを感じた。

神父「次の者は前に・・・」

その言葉に和樹は恐るおそる従い神父の前に立った。

神父「私の質問に答えなさい。」

和樹「・・・はい」

神父「名前は・・・」

和樹「相川和樹です。」

神父「死因はなんだ。」

和樹「バイクの事故です・・・女性の霊に殺されました。」

神父「そうか・・・では和樹今お前には選択肢が2つある。1つは現世に未練や恨みがある場合現世に戻り霊として漂うか。もう1つは我々の世界の住人となり新しい生活を送るか・・・選びなさい。」

和樹「・・・」

和樹は黙って眉間にしわを入れながら考えたが、答えを出すのには時間は掛からなかった。

和樹「この住人になる。現世の生活には飽きていたし、未練も恨みも無いからこっちの住人になって第二の人生を送った方が面白そうだ。」

和樹は少し笑って答えた。

神父「分かった。では右の扉から行きなさい。」

神父が言うのと和樹は扉の前に立ち扉を開けた。扉を開けると真っ白い空間が広がっていた。和樹が教会から出た時神父が、

神父「第二の人生せいぜい気を付けなさい。」

和樹が声に戻り返った時には教会と扉は消えていた。和樹が前を向くと今度はバス停がポツンと立っていて、バスも止まっていた。

和樹は吸い寄せられるようにバスに乗り込んだ。バスの中には20人ぐらいの乗客が乗っていてバスはゆっくりと走り出した。窓の外は深い霧に包まれてどこを走っているのかわからない状況だった。

走行してしばらく経つと霧が晴れていき、前には大きな門が現れた。バスは門に入りある建物の前に停車した。建物の名は「死役所」(しやくしよ)。和樹と乗客は建物の中に入っていった。中は現世の市役所の雰囲気と変わりはなかった。

職員「それでは、皆さんこちらの用紙に記入し、受付をお願いします。」

そう言うと職員の方は全員に用紙を渡した。用紙の記入欄には、氏名、生年月日、死因、現世での住所を記入する欄があり和樹は記入し受け付けに行った。

受付員「こんにちは、用紙を拝見いたします。」

和樹「はい。」和樹が用紙を渡す。

受付員「相川和樹さんですね。え〜と死因は事故死で住所は〇〇県〇〇市ですね。それでは、現世での和樹さんの財産を確認して住民登録しますのでしばらくお待ちください。」

和樹がしばらく待っているとアナウンスがなる。

アナウンス「相川和樹様、相川和樹様、登録が終了しましたので5番受付までお越しください。」

和樹が5番受付に行くと、

受付員「お待ちいたしました。こちら住民カードになりますので無くさないようにお持ちください。この後別室で住人説明会がありますので必ず出席してください。」

職員「それでは新規の住民の皆さん説明会がありますのでこちらの部屋にお集まりください。」

和樹と他の新規住人は別室に入るとメガネを掛けたスーツ姿の温厚な感じの男性が立っていた。

徳丸一二三「皆さん席についてください。」和樹達は机に座った。

徳丸一二三「私は皆さんにこの世界のルールを説明する、徳丸一二三とくまるひといひます。どうぞよろしく、それでは説明に入る前に私から一言……。」

徳丸一二三「ようこそ、デッドワールドへ。」

第2章 「オムニチン」ブランドの導入……「終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5359x/>

その後の世界

2011年10月20日03時02分発行